

はしがき

再び製造業が注目される今日である。

人類の営みが始まって以来、生産活動やそのアウトプットは国家や地域の覇権の入れ替わりや、世界経済の変貌を左右してきたと言っても過言ではない。たとえば香辛料、砂糖、コーヒー、綿織物、鉄などがその代表的なものであった。今日では半導体やバッテリーなどがその座を占めているように見える。

今日、生産活動をめぐる目覚ましい変革が起きている。当たり前だった日常が、実はそうではないことを自覚させたコロナ禍の中で起きたサプライチェーンの寸断。また、未来の国家競争力を左右する半導体やバッテリー、5G通信、次世代モビリティ、ロボット、AI（人工知能）、クラウド産業などをめぐる技術覇権争いが本格化している。デジタル産業に高いプレゼンスを有する米国さえ、自国製造業の復活とともに海外からの製造企業誘致にも積極的である。さらに、ウクライナの戦争や米中の覇権争い、紛争などの地政学的リスクが重なり、これまで世界経済発展の原動力となっていた自由貿易に変化の兆しがみられ、自国優先主義に立った製造業の強化が行われつつある。

こうした世界の流れの中で、日本の状況はどうだろうか。

ものづくり大国といわれる日本の製造業の競争力は、労働生産性の低迷に見るように、今日その存在感が薄まっている。再び製造業を軸に競争力向上を図るには、デジタル時代のものづくりに合致した人材育成が不可欠である。本書がテーマとする「生産マネジメント論(または生産管理論)」の学びが必須となる。

本書のテーマである生産マネジメント論は、経営学の誕生と軌跡を共にする古い学問分野である。日本の大学では、古くから生産マネジメント論が中核的な科目として位置付けられていた。しかし、時代の変貌と日本の製造業のプレゼンスの変化とともに、同分野への世間や、研究者、学生の関心も低下した。

この分野では、これまで数多くのテキストが出版されてきた。現在の代表的なテキストであっても、刊行から年月を経たものが多い。生産マネジメントの

本質を学ぶには問題ないかも知れないが、デジタル時代の若者がそれを学ぶには問題があると思われる。これまでのテキストは、品質、コスト、納期といったキーパフォーマンスに過度な重点を置いていたり、管理ルーチンの部分的な解説に留まっているものが多かった。また、日本企業の成長期を背景とするものが多く、今日の状況を反映しつつ、デジタル技術の革新性と利活用問題に十分に触れていない。さらに、従来のテキストを実務の世界からみると、生産マネジメントの全体図や流れを理解する上では限界があると思われる。

そこで本書は、いま、生産マネジメントを学ぶ読者に役立つこと念頭に、以下のような構成・特徴を備える教科書として企画している。

①ものづくりの本質が「淀みのない流れづくり」であるという観点に立ち、世界の標準的なテキストも参考にしながら、生産マネジメントの範囲と全体の流れを描き、実際の仕事の順序に沿う形で章の構成をしている。

②生産およびサービスの現場で必要とされる主要な概念と考え方、デジタル化を含む新技術の応用および企業の課題などを取り扱っている。

③原価計算と原価管理の仕組み、生産活動と密接な関係にあるサプライチェーン・マネジメント分野の最新の研究成果、そしてデジタル化や第4次産業革命、スマートファクトリーなど、今日の生産現場および企業が直面しているデジタル技術の活用などに関する最新事例とそれに関連する諸課題を扱っている。

④さらに、原価管理においても、単なる管理目標と改善活動だけではなく、原価計算と原価管理の仕組みなどを加え、生産の流れと管理目標、特に原価との関連性を考える構成にしている。

本書は、文理系の出身を問わず、生産マネジメント論に興味のある大学生や一般、企業人などを対象に執筆したものである。変革の時代に、生産（サービス）現場の競争力を高めつつ、デジタル化の波に遅れない現場のマネジメントのあり方と生産戦略の構想、現場の状況の理解・改善を試みる読者に、役立つ一冊になれば幸甚である。